

「イエスとともに歩む」とともに歩む人①

マルコ 5・21-43

ヤイロの娘とイエスの服に触れる女

ヤイロはイエスとともに歩む。人間的な希望を打ち砕かれ嘲笑を浴びせられても
とともに歩む。

【第一回】

暮らしの中に、イエスとともに歩いていけるだけの十分な
根拠を見つけましょう

●おはようございます、あるいは、こんばんは。黙想会の
テーマを「イエスとともに歩む」としてみました。昨年
(2021年)でしたか、「世界代表司教会議 第16回通常総
会」に向けて、小教区ごとに「ともに歩む教会」この姿勢
がどれくらい行き渡っているか、質問書に答えて、さらに
平戸地区全体で集まって分かち合いをしました。

●取り組みながら、「2022年の黙想会をどこかの教会に頼
まれたら、『イエスとともに歩む』このテーマで話せたら
いいなあ」と考えていました。私はあまりガツガツとアピ
ールして売り込むタイプではないので、「チャンスが巡っ
てきますように」と願い続けていたのです。

●それはもう熱心に願いました。今年になってからは趣味
の釣りに出かける際も「チャンスが巡ってきますように」
とお願いしていました。「釣れますように」ではないんで
す。「黙想会のチャンスが巡ってきますように」そう祈り

ながら釣りをしていたのです。願いは叶えられました。紐差小教区から、お呼びがかかったのです。

●1月の下旬だったかなと思います。温かい日でした。いつものように船外機のボートで釣りに出まして、何でも良いから釣れたらいいなくらいの気持ちで午前中出かけました。青瀬崎灯台近辺です。正味2時間の釣りで、キジハタ一匹と、マダイを一匹釣りしました。すぐに浮かんだのは「これは先輩たちに持っていかねば」でした。

●これには理由があります。中田神父は平戸地区ではオオカミ少年扱いされていて、会議で集まるたびに「魚を釣った話は聞くけれども、もらったためしがない。それは私だけでなく、皆同じだろう？」とイジられていたのです。それで先輩方に口封じをしなければと思い、持っていくことにしました。

●ここから先はナイショですが、キジハタは「魚を選ぶ」松下神父様に、マダイは「どんな魚でも喜んでくれる」濱口神父様に持っていきました。そのことが頭のどこかにあったのでしょうか。今年、濱口神父様から黙想会の話をいただいたのです。

●「海老で鯛を釣る」という諺がありますよね。今回、「鯛で黙想会を」釣りしました。それは冗談としても、私が言うのも何ですが、祈りは聞き入れられると思っています。まず、誰に祈っているかを考えてください。全能の神様に祈っているわけでしょ？近所の人をお願いしているのとは訳が違います。だから、祈りは聞き入れられる。これが私の長年の経験から得た確信です。

●一回目の話の本題に移りましょう。この黙想会の中では「ともに歩む人」を学ぶために、聖書の物語を読みます。聖書の中の「ともに歩む人」を、自分自身に当てはめていきます。そして、自分に何ができるかを見つけることにしましょう。今回はマルコ5章、「ヤイロの娘とイエスの服に触れる女」です。

ヤイロの娘とイエスの服に触れる女（マルコ5・21-43）

5:21 イエスが舟に乗って再び向こう岸に渡られると、大勢の群衆がそばに集まって来た。イエスは湖のほとりにおられた。

5:22 会堂長の一人でヤイロという名の人に来て、イエスを見ると足もとにひれ伏して、

5:23 しきりに願った。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」

5:24 そこで、イエスはヤイロと一緒に出かけに行かれた。大勢の群衆も、イエスに従い、押し迫って来た。

5:25 さて、ここに十二年間も出血の止まらない女がいた。

5:26 多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなるだけであった。

5:27 イエスのことを聞いて、群衆の中に紛れ込み、後ろからイエスの服に触れた。

5:28 「この方の服にでも触れればいやしていただける」と思ったからである。

5:29 すると、すぐ出血が全く止まって病気がいやされたことを体感じた。

5:30 イエスは、自分の内から力が出て行ったことに気づいて、群衆の中で振り返り、「わたしの服に触れたのはだれか」と言われた。

5:31 そこで、弟子たちは言った。「群衆があなたに押し迫っているのがお分かりでしょう。それなのに、『だれがわたしに触れたのか』とおっしゃるのですか。」

5:32 しかし、イエスは、触れた者を見つけようと、辺りを見回しておられた。

5:33 女は自分の身に起こったことを知って恐ろしくなり、震えながら進み出てひれ伏し、すべてをありのまま話した。

5:34 イエスは言われた。「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。もうその病気にかからず、元気に暮らしなさい。」

5:35 イエスがまだ話しておられるときに、会堂長の家から人々が来て言った。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」

5:36 イエスはその話をそばで聞いて、「恐れることはない。ただ信じなさい」と会堂長に言われた。

5:37 そして、ペトロ、ヤコブ、またヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれもついて来ることをお許しにならなかった。

5:38 一行は会堂長の家に着いた。イエスは人々が大声で泣きわめいて騒いでいるのを見て、

5:39 家の中に入り、人々に言われた。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ。」

5:40 人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスは皆を外に出し、子供の両親と三人の弟子だけを連れて、子供のいる所へ入って行かれた。

5:41 そして、子供の手を取って、「タリタ、クム」と言われた。これは、「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」という意味である。

5:42 少女はすぐに起き上がって、歩きだした。もう十二歳になっていたからである。それを見るや、人々は驚きのあまり我を忘れた。

5:43 イエスはこのことをだれにも知らせないようにと厳しく命じ、また、食べ物を少女に与えるようにと言われた。

●物語を整理してみましょう。会堂長ヤイロの幼い娘が死にかかっています。この娘は父親にとって「希望のすべて」だったでしょう。もし亡くなれば、立ち直れないかも知れません。追い打ちをかけるように使いの者がやって来て、「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」(5・35) と言うのです。絶望の淵に立たされたのではないのでしょうか。

●また、途中に挟み込まれている「イエスの服に触れる女性」も同じように絶望の淵に立たされていました。彼女は十二年間出血症が止まらず、「多くの医者にかかって、ひどく苦しめられ、全財産を使い果たしても何の役にも立たず、ますます悪くなる」(5・26) ばかりでした。

●決断の時が来ていました。ヤイロは、使いの者の「もう、先生を煩わすには及ばないでしょう」との言葉に従って、イエスとともに歩むことをやめることも考えたでしょう。このままイエスとともに歩き続けたら、イエスをあざける人々の声は、ヤイロにも降りかかります。しかし最後まで、イエスとともに歩むことを選びました。

●出血症の女性も、決断の 때가近づいていました。全財産をすでに使い果たし、群衆に紛れてイエスとともに歩む力も残っていません。群衆に紛れている自分にイエスが気付いてくれる保証もありません。ここで身を引くことも考えたでしょう。しかし最後まで、イエスとともに歩むことを選びました。

●最後までイエスを信頼し、ともに歩いてくれた二通りの登場人物に、イエスは「わたしはあなたがたとともにいる」ということを証明します。しかも具体的に、疑う余地のない形で証明します。

●出血症の女性には、「病気が完全に治ったこと」「自分に触れた女性に、ご自分が誰なのか」を知らせたいと願ったのです。女性がイエスの服に触れるまでイエスが知らなかったのではなく、群衆に紛れていた出血症の女性を初めから気にかけていた。イエスがこの女性とともに歩んでおられたことを証明しようとしたのではないのでしょうか。

●会堂長ヤイロには、出血症の女性よりも試練を受けました。出血症の女性は、群衆の中に紛れてイエスとともに歩んでいましたが、ヤイロは物語の中心人物です。すべての人の目がヤイロに注がれていました。ヤイロはイエスとともに歩むことで、その後の人生にも影響が及ぶことになります。最後はイエスをあざ笑う人々の中を、イエスとともに歩むことになります。

●最後までイエスとともに歩むヤイロを、イエスは決して見捨てませんでした。ヤイロの娘は生き返ります。ヤイロの心を支配していた「恐れ」は打ち消されました。人々の

あざけりに、心は折れかかっていたはずですが、イエスとともに歩む人は絶望に終わらないことをイエスが目の前で証明してくれました。そもそもイエスは、ヤイロがイエスの足もとにひれ伏して願う前から、ヤイロのことを気にかけて、ともに歩んでおられたのではないのでしょうか。

●聖書は、2千年前の遠い国の物語と考える人が多いと思います。地名や名前はカタカナですし、ぶどう園とか羊飼いか、身近にありません。けれども、繰り広げられていることは私たちのまっただ中で起きている出来事です。そこが理解できると、物語はもっと身近になると思います。

●十二年間病気に悩まされている人は、聖書の中だけではないでしょう。幼い子が死の危険に陥って絶望の淵に立たされるのも、私たちの誰かが通ってきた体験だと思います。聖書を丹念に読むと、私たちの中で起こっている出来事を見つけるし、そこでイエスがどのように救いの手を差し伸べてくれるかも見ることができるのです。

●「善いサマリア人」というたとえがありますよね。強盗に襲われ、半殺しの目に遭ったユダヤ人を誰も助けてくれない中で、たまたま通りかかったサマリア人が助けてくれた。あの物語です。私はあの物語を、私が体験したことで理解しました。まさに「善いサマリア人であるイエス」は、聖書の中にいたのではなくて、私のそばにいてくれたのです。

●30年以上も前の話ですが、私は大神学生の際に交通事故を起こしたことがあります。先輩にお借りした車で夏休み期間中に上五島を走っていたときのことで。当時神学

科一年で、スータンを着て間もない時期でした。

●あと思ったときには運転している車は前方の車にめり込んでいきました。ガシャンという音を立てて、車と車がくっつく様子は、いまでもはっきり覚えています。相手方は首が痛いということで病院にかかり、事故は人身事故となってしまいました。

●目の前が真っ暗になると言うのは、ああいうことを言うのだなあと思いました。順調にいけばあと三年で司祭になるところでしたが、これで私の将来は閉ざされたなあ、と思ったわけです。私は事故後、父親に伴われて被害者の方に誠心誠意謝りに行きましたが、気持ちとしては糸の切れた凧のようでした。

●その後、福江の裁判所から出頭命令が出て、裁判所では免許停止三ヶ月と言い渡されて、大神学校に戻ってから福岡の篠栗というところにある教習所で交通事故を起こした人が受ける講習会に参加しました。

●大神学校には残れないと思っていたので、これからどうしよう？何か仕事を見つけないといけないのだろうか、いろいろ考えました。ところが被害に遭われた方は理解ある人でした。無事に快復したあとで、私が司祭を目指している学生だと知って、続けて頑張ってくださいと父親に伝えてくれたのだそうです。

●心から感謝しました。暗闇の体験を初めて味わい、自分を責めたのですが、振り返ってこう思いました。車をぶつけたとき、誰も助けることのできないその場所に、「善いサマリア人」であるイエスは通りかかってくださったので

はないだろうか。そう思ったわけです。

●誰も助けてあげられない状況でした。私の責任で引き起こした事故ですから、どう処罰され、将来を断たれても何も言えない身分だったのですが、イエスだけは最後まで見捨てることをしなかったのです。イエスは先に、打ちひしがれている私とともに歩んでくださって、イエスとともに歩む生き方を教えてくださったのでした。

●誰にも助けてもらえそうにない中で、幸いにイエスに憐れみをかけてもらい、今に至っています。私は、信仰と結びつけて、確かにこれは神が働いてくれなければよい方向には変わらなかったと感じています。皆さんはどう感じたでしょうか。

●イエスは今も私たちとともに歩んでおられます。このコロナ禍の時代にも、イエスは困り果てている私たちとともにいてくださり、誰にも変えられなかった局面を打開してすっかり変えてくださいます。

●ともに歩んでくださるイエスにいつか私たちが気付いて、群衆に紛れてでもいいからイエスについていく。場合によっては人々の冷たい視線にさらされながらイエスについていく。その先に、私たちの救いが用意されています。イエスについて行って良かったと思える答えが示されます。

●聖書愛読の取り組みも各教会続けているでしょう。聖書愛読で以前よりも聖書が身近に感じられたでしょうか。もしかしたら、聖書愛読でも身近には感じていないかも知れません。しかし今回のように、何か糸口が与えられると、

今までとは違って聖書が身近に感じられるのではないで
しょうか。

●一回目の話では、「人間的な希望を打ち砕かれ、嘲笑を浴
びせられた人たち」が登場しました。希望を徹底的に打ち
砕かれた人でも、イエスとともに歩むなら私たちに希望を
取り戻してくださいます。イエスは、どんな目に遭ってい
る人にも、ともに歩む価値のあるお方です。

「イエスとともに歩む」とともに歩む人②

ルカ 24・13-35

エマオで現れる

ともに歩いているイエスに気付かない人。「心を燃やす人イエス」に案内されつつ、ともに歩む。

【第二回】

「主の日」から「主の日」まで私たちにできることがある

・私たちの暮らしは、「一週間」が基本と思います

●二回目の話は、「一週間の組み立て方」を考えてみようと思っています。お一人おひとり、いろんな暮らしの中に置かれているわけですが、たいていの方は、「一週間」を一つの区切りとして生活を立てているのではないかなあ、と思っています。

●一週間を一区切りと考える生活をですから、「ある曜日から、一週間後の同じ曜日まで」が、その人にとっての一週間になるわけです。あまり褒められた話ではないのですが、中田神父の一週間は、「月曜日から月曜日」が、区切りになっていると思います。日曜日がいちばん忙しいので、日曜日の晩には「あー終わった」そう感じます。

●月曜日はたいていの神父様が休みを入れている曜日だと思っています(もちろん水曜日がお休みの神父様もおられます)。土曜日のミサ・日曜日のミサ、またはその他の必要

なお世話を一通り終えて、ホッと一息つくのが月曜日です。月曜日が終われば、また次の日曜日に向かって、気持ちを向けていく。説教の準備に頭を切り換える。そういう過ごし方をしています。

●誰でも、一息入れる日は必要です。365日いっさい変えずに過ごそうというのは、私の考えでは、あまりお勧めできないですね。気分転換できる日がどこかに入っていないと、人間は機械ではないですから、疲れが溜まってしまうと思うのです。

●一週間を組み立てる中でも、日曜日が一つの区切りになっている方が多いのではないのでしょうか。そこで、日曜日が切り替えの大切な日になっている方々に、日曜日に何が含まれているか、もう一度考えてもらいたいと思います。

●日曜日は家族でお出かけをする日ですとか、日曜日ぐらいしか釣りに行けないので、趣味の釣りを楽しみます。どれもステキなことですが、やはりカトリック信者ですから、日曜日にミサに行くこと、ミサを通して一週間の区切りをつけてもらえたらなあと思います。

●振り返ってみて、日曜日のミサは楽しみになっているのでしょうか。気持ちを切り替える日、さあ次の一週間も頑張るぞと、そういう力・恵みをいただくひとときになっていないと、行くたびに疲れてしまうのではかわいそうです。

●集まってきたみんなと親しく話すこと。ミサ中、司祭が何かしら参考になるような説教をしてくれること。しばらく静かに聖堂にとどまること。内側から満たされる喜びとか、そういう「ここでしか味わえない」喜び・楽しみ

があるでしょうか。

●ぜひ、何かを見つけて、日曜日のミサから新しい一週間に向かって行って欲しいと思います。神様が皆さんを集めているこの場所、教会に集まってしか味わえないものが次の一週間の糧になる。いろんな一週間の切り替え方の中で、教会のミサで一区切りというのがいちばんすぐれていると思います。

●「日曜日のミサ、説教が何より楽しみです」という方はいらっしゃるでしょうか。その教会の主任神父様は幸せでしょうね。司祭は責任も感じるだろうと思いますが、修道者・信徒が次の一週間に進んでいくため何かの力添えになれるなら、何かヒントをあげられるなら、司祭にとって日曜日の務めはこれ以上ない喜びだと思います。

●少し横道にそれるかも知れませんが、信徒の皆さんは上手に神父様を働かせて欲しいと思います。社会生活でも、多くの方は「働かされているから」一生懸命働くわけです。でも司祭は「働かされている」とあまり思っていない。ある意味、信徒の皆さんが上手に働かせることは、これは人間の知恵だと思います。

●例えばミサの後「神父様お説教ありがとうございます」と言われれば、多くの神父様方はさらに磨きをかけようと思うのではないのでしょうか。今赴任されている神父様を、よく働くようにおだてて仕向ける。ちょっとしたことですが、「神父様を働かせる」というのは、ある意味修道者・信徒皆さんの務めと思っています。

・エマオでの出来事に、考えるヒントを見つけます

●私たちが生き生きと暮らし続けるためには、どこかで一区切りがあって、その区切りが、教会に集まってミサにあずかり、説教を聞き、聖体に養われることであれば、すばらしいということでした。

●今からルカ福音書の 24 章、復活したイエスがエマオで現れる場面を朗読します。エマオで復活したイエスに出会うことになった二人の弟子は、歩いている途中、一緒に歩いているのがイエスだと気がつきませんでした。「気づかないままイエスとともに歩む人」について考えさせてくれます。では朗読します。

◆エマオで現れる (ルカ 24・13-35)

24:13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、

24:14 この一切の出来事について話し合っていた。

24:15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。

24:16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

24:17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。

24:18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」

24:19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。

24:20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。

24:21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。

24:22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、

24:23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。

24:24 仲間の者が何人か墓へ行って見たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」

24:25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、

24:26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」

24:27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

24:28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。

24:29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。

24:30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の

祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。

24:31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。

24:32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。

24:33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、

24:34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。

24:35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いて下さったときにイエスだと分かった次第を話した。

●一回目の話では、登場人物は「イエスとともに歩んでいる」と理解していました。たとえ苦しい道のりでも、「イエスとともに歩んでいる」という確信がありました。しかしエマオでの出来事は、登場人物に「イエスとともに歩んでいる」ことが隠されています。もう少し上級の段階になっている、と言えるかも知れません。

●四ヶ所、取り上げます。一つ目は、エマオという村の場所です。「エルサレムから六十スタディオンの離れた村」です。「スタディオン」という単位は約 185m でした、その 60 倍で 11 キロちょっとということになります。

●これは「距離が離れている」ということのほかに、「遠ざかっている」ということも込められているでしょう。長く遠ざかっていると、分かるはずの人も分からなくなるはずです。たとえ身内でも、20 年会っていないと、きっと誰

だか判別がつかないでしょう。

●エマオに向かっている弟子たちは、イエスが十字架にはりつけにされた、しかも自分たちのおもだった人が十字架にはりつけにしてしまったことでガッカリして、気持ちは遠く離れていたわけです。

●教会家族の中でも、すでに遠く離れている人もいます。す。「天にまします」「めでたし」しか言えない人もいるかも知れません。葬式の遺族が、ミサの進み方が全く分からない。告白もいつ以来していないか分からない。当然聖体拝領もできない。そこまで遠く離れている人もいますでしょう。それでもイエスはともに歩んでくださり、辛抱強く教え導いてくださいます。(イエスの代わりが必要)

●二つ目は、「二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった」ということです。このエマオに向かう弟子たちは十二人の弟子ではありませんので、もしかしたら近くで顔を見ていなかったのかも知れません。見間違えることもあったかも知れない。

●あるいは、思いが強すぎて、見落とすかも知れません。クレオパともう一人は、二度とお会いできないと思ったから見えなくなっていたのですが、私はそれとは真逆の体験があります。完全にその人と思い込んで、話しかけたことがあります。

●一度目は、天草に行って今は亡き川添神父様に会おうとしているときでした。日時をお約束して出かけまして、島原の口之津港に来た時です。待合所の傍らに、カーディガンを着た普段着の川添神父様がいるではありませんか。

●実際は赤の他人だったのですが、「会いに行く」と決めて出かけているので、川添神父様にしか見えなかったのです。「神父様！」と声をかけようとした瞬間、待合所に入っていた奥さんらしき人がやって来て、二人は消えてしまいました。「絶対に川添神父様だ」と思ったので、そうとしか思えなかったのです。

●二度目も、完全に人違いで、さらに悪いことに「おー久しぶり！こんなところで働いてたんだね」と懐かしさいっぱい話しかけてしまいました。私が代表を引き受けている「声の奉仕会マリア文庫」という視覚障害者のために録音を通して支援するボランティアがありまして、施設の代表は九州全体の協議会に加盟しております。その方々との理事会に出席したとき、大分の理事で全盲の方のアシスタントとして来られていた人を、かつて手話のボランティアで顔見知りだった長崎市内の人と勘違いしたのです。

●「あの～。私はきっと人違いだと思いますよ。」そう言われて愕然としました。本当に、人違いだったのです。そして九州の協議会には今も顔を出してしまして、人違いだったその人とも毎年会って、ばつの悪い思いをしております。

●とにかく、私たちの目は、強い思い込みやショック状態で遮られていると、本当に見間違えたり、見抜けなかったりするのです。エマオに向かっていた弟子たちも、すっかり気落ちしていたので、見ているのに見えなかったのです。

●三つ目は、「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解

放してくださると望みをかけていました」という証言です。これは、二人の弟子たちがイエスについて十分に理解していた、ということを表しています。十分に理解していても、遠く離れてしまっているとイエスがともに歩んでおられることが分からなくなります。強いショックを受けると、十分な知識も役に立たないことがあります。

●たいていの大人の人は、要理を徹底的に習ったはずで、暗記して、公教要理の本を見ないですらすら言えるようになっていたはずで、イエス・キリストのこと、教会のことを十分に理解していても、教会から遠ざかってしまえばイエスがともに歩いてくださっていることが分からなくなってしまう。

●ひょっとしたら、教会の中の人につまづいてショックを受け、大切なものが見えなくなっているかも知れません。主任神父様につまづいて、一切教会に行かなくなった人。教会の信者さんの裏の一面を知ってショックを受けて遠ざかった人。残念ですがそういう人も確かにいるでしょう。

●けれども、人間の仕業は限られた時間です。一生涯あなたを苦しめるわけではありません。しかし幼い頃に受けた宗教教育は、生涯の宝物です。洗礼を受けた人に、イエスは生涯ともにいてくださいます。ともに歩いてくださいます。ずっと気づかないままでも、忍耐強く、教え導いてくださるのです。

●四つ目は、イエスが「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」ということです。イエスがともにい

て歩いてくださっていることは、やはりミサにおいて、最も強く働きかけるということです。

●コロナ禍になり、この二年間で何十日も公式のミサを休みました。ミサの依頼が無くなって、神父様方も干上がってしまいました。もちろん司祭は、誰もいない中でもミサをささげています。それは務めだからというだけではなく、「イエスがともにいて歩いてくださっていることは、やはりミサにおいて、最も強く働きかける」この確信があるからです。

●2月23日、日本の教会はペトロ中村倫明長崎大司教の着座式ミサを祝いました。嚴重な感染対策のため参列者は300人ほどでしたが、多くの人の目が中村大司教様に注がれている、そう感じさせる熱量がありました。あれはきっと聖霊の働きだったのでしょう。

●どんなに人数が少なくても、ミサはイエス・キリストを祭壇上でおささげする祭儀です。司祭にとって、イエスがここに、ともにおられると、最も強く感じる瞬間です。ここで、ともに歩いてくださるイエスを確信して、司祭は宣教司牧の力を得るのです。

●ようやくミサが再開しました。修道者・信徒も、祭壇から「ともに歩いてくださるイエス」の体験を持ち帰って、社会の中でそれぞれの証をしてほしい。祭壇の食卓・みことばの食卓から、「ともに歩んでくださるイエス」を持ち帰って宣教しましょう。

「イエスとともに歩む」とともに歩む人③

ヨハネ 3・1-21

イエスとニコデモ

「イエスとともに歩こう」と考え始める人。導く人がいて、初めて歩き始めることができる。

【第三回】

のちにイエスと出会い、イエスとともに歩こうと考え始める人

・(前回の続き) みことばと祭壇の食卓に触れてイエスを理解した人

●前回の話を少し補わせてください。エマオに向かう二人の弟子は、イエスが「パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。すると、二人の目が開け、イエスだと分かった」のでした。この体験は当時だけではありません。私たちの中でも、知らずにいたけれどもずっとイエスがともに歩いてくださっていた、そのことをみことばと祭壇の食卓に近づくとき初めて理解するのです。

●私には、生涯忘れられない高齡の夫婦がいます。この夫婦のことを知ったのは、ご主人が司祭館を訪ねてくれたことからでした。「どうしましたか？」と尋ねると、ご自身の身の上話を詳しく聞かせてくれました。

●「自分の妻はカトリックなのだけれども、当時私が妻と結婚するときに求められていたのはカトリックの洗礼を

受けることでした。しかしその時は納得がいかず、洗礼を受けるのを拒みました。すると結婚式も挙げてもらえませんでした。」

●「結婚生活は始まりましたが、妻は教会で結婚できなかったことに負い目を感じ、それからは一度も教会に行くことができませんでした。結婚してすでに40年以上です。しかし最近健康診断を受けたところ、妻ががんに冒されていることが分かりました。」

●「妻は生涯私を支えてくれましたが、私はそんな妻に十分応えていないと感じていました。今なら、私も洗礼を受けることに抵抗はありません。そして妻の残された時間が少なくなっています。もし私が洗礼を受けたら、教会で結婚式を挙げてもらえるでしょうか？」

●私は「もちろんですとも！問題はすべて乗り越えられます」と答えました。それから、急いでご主人の洗礼の準備を進めました。こんな状況ですから、信仰宣言の祈りをよく説明して、主の祈り・アヴェマリアの祈り・栄唱を教えて、イエス・キリストの生涯を話す。それくらいしか求めませんでした。

●いよいよ準備が整い、ご主人の洗礼名を考えましようとなりました。奥さんの洗礼名はアンナでした。私は躊躇せず、ご主人にとある洗礼名を提案しました。「お父さん。洗礼名はヨアキムにしませんか？」皆さんご存知でしょう。聖ヨアキムと聖アンナは、聖マリアの両親です。

●待ちに待った日曜日の午後、洗礼式堅信式と結婚式のミサを挙行了しました。この日は同じ教会のご近所の人が集ま

ってくれました。奥さんはこれまで美容室を経営していたので、お世話になっていた信者さんが何人もいたのです。新郎新婦は、年齢に関係なく、本当に輝いていました。

●その後、奥さんは病気が進行し、病院に入院しました。そして最期をまっとうして天に召されました。教会法の上では、神の前に長い時間夫婦ではなかったのですが、私はこの二人のそばに、ずっとイエスがともに歩いておられて、導いておられたのだと思います。

●ご主人は、かつてエマオにイエスと向かっていった弟子たちのように、そばにイエスがおられたことを気づかずに過ごしてきたのですが、みことばと祭壇の食卓に近づいたことで、夫婦のそばにイエスがともにおられることをはっきり知ったのです。祭壇に近づかなければ、神がこれまでの人生をともにしてくれていたことに気づけなかったでしょう。本当に美しい夫婦の物語を見せてもらいました。

・みことばと祭壇の食卓から養われた人の使命

●これまで二回の話は、「はっきり自覚を持ってイエスとともに歩み、その後の生涯をイエスとともに歩む人」の話と、「イエスと知らずにとともに歩いていたが、それを知ってその後の生涯をイエスとともに歩む人」の話でした。

●ほかの人生もあります。「イエスのことを知っていて、より深く耳を傾けて受け入れ、その後の生涯をイエスとともに歩む人」の話です。これに当てはまるのがイエスとニコデモとの対話です。朗読して、味わってみましょう。

◆イエスとニコデモ（ヨハネ 3・1-21）

3:1 さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。

3:2 ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」

3:3 イエスは答えて言われた。「はっきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

3:4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができるでしょうか。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」

3:5 イエスはお答えになった。「はっきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。

3:6 肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。

3:7 『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。

3:8 風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

3:9 するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえますか」と言った。

3:10 イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。

3:11 はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。

3:12 わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。

3:13 天から降って来た者、すなわち人の子のほかには、天に上った者はだれもない。

3:14 そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

3:15 それは、信じる者が皆、人の子によって永遠の命を得るためである。

3:16 神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

3:18 御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。

3:19 光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。

3:20 悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。

3:21 しかし、**真理を行う者は光の方に来る。**その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

●ファリサイ派の議員であったニコデモはイエスの噂を聞き、夜に訪ねていきます。ヨハネ福音書の中で「夜」を

強調する場合は、「悪」とか「闇の勢力」が意識されていると考えられます。「夜」が強調されている箇所をもう一つ取り上げると、イスカリオテのユダがイエスを裏切る始まりとなった場面です。

●それはヨハネ福音書 13 章で、イエスが弟子たちの足を洗い、皆食事の席に着いたときに「はっきり言うておく。あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」(13・21)と断言されます。話が進む中、「ユダはパン切れを受け取ると、すぐ出て行った。夜であった。」(13・30)となっています。ここにも「夜」が「闇の勢力」の象徴として取り上げられました。

●ニコデモの話に戻りましょう。彼は「夜」に訪ねてきたので、その時点では「闇の勢力」に支配されていました。イエスの評判はもちろん知っていました。「ラビ、わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」しかしイエスに自分を委ねきる決断はできていませんでした。恐れや不安に支配されたままだったのです。

●イエスはニコデモを恐れや不安から解放します。ニコデモの質問に、イエスが一つずつていねいに答えてくださる様子が引用箇所からよく伝わります。物語の中に「ニコデモは言った」「イエスは答えて言われた」が三回繰り返されていたのにお気づきでしょうか。イエスに耳を傾けようとする人、イエスとともに歩き始めようとする人に、イエスはどこまでもていねいに寄り添ってくださるのです。

●物語の後半は、「ニコデモとの対話」を超えた内容へと広がっています。そのしるしとなっているのが、11 節です。「はっきり言うておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証ししているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。」

●変だと思いませんか？ イエスとニコデモの対話で始まったはずなのに、「わたしたちは」「あなたがたは」となっていますね。物語はニコデモ一人に留まらず、イエスの言葉に真剣に耳を傾けようと考え始めているすべての人に及んでいるのです。

●そして物語の最後は「光」という言葉が強調され、すべての人が光に照らされます。「光が世に来た」「真理を行う者は光の方に来る」こうして、「夜」にやって来たニコデモ（それはイエスに耳を傾けるすべての人を含みます）は「光」に照らされ、光に導かれて生きるようになるのです。

●ニコデモはさらに7章で登場します。ユダヤ人指導者たちが下役に命じてイエスを逮捕させようとしませんが失敗します。この混乱の中でニコデモはイエスを擁護するのです。「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはならないことになっているではないか。」(7・51)

●ニコデモはすでに、イエスという真理の光に照らされて歩き始めていました。さらにもう一度、イエスの十字架の場面で登場します。ヨハネ 19 章 38 節から 40 節です。

その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、イエスの遺体を取り

降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて亜麻布で包んだ。

●これだけのことを、人間個人の力だけでできるでしょうか。ユダヤ人を恐れています。それでもこれだけのお世話を実行しました。それは、イエスに耳を傾けて、イエスとともに歩いてみようと考えたその人に、イエスがともに歩んでくださっているからできるのではないのでしょうか。

●きっと、物語の初めから、イエスはともに歩んでくださっているのだと思います。(紐差教会では) 三回のお話を通じて、①「はっきり自覚を持ってイエスとともに歩み、その後の生涯をイエスとともに歩む人」の話と、②「イエスと知らずにとともに歩いていたが、それを知ってその後の生涯をイエスとともに歩む人」の話、③「イエスのことをいくらか知っていて、より深く耳を傾けて受け入れ、その後の生涯をイエスとともに歩む人」を取り上げてみました。

●そのどれも、人間個人の力だけでは歩みをとともにすることはできないと思うのです。実は、その初めから、イエスはともに歩んでくださっていたのではないのでしょうか。当然、私たちの信仰の道のりの中でも、私がイエスとともに歩んでいこうと意識するはるか以前から、イエスは私たちとともに歩んでこられたのだと思います。

●そこで、三回目の話の結びです。あなたが誰かの「ともに歩む人」になってほしいのです。イエスのように、①「は

っきり自覚を持っている人とともに歩む人」、②「イエスと知らずにいる人とともに歩む人」、③「イエスにより深く耳を傾けようとしている人とともに歩む人」になってほしいのです。

●置かれている生活はさまざまです。生活時間のほとんどが家庭の人もいます。反対に、職場で中心となって働いていて、生活時間のほとんどを外で過ごしている人もいるでしょう。それぞれの生活で、「自分と同じカトリックの信仰を持っている人」「カトリックの信仰の人を自分以外に見つけ出せない人」「カトリックの信仰に一定の理解を示してくれる人」こうした人がいらっしやると思います。どうかその人たちにとっての「ともに歩む人」であってください。

●例を挙げてこの話を終わります。フランシスコ教皇です。全世界のカトリック信者の指導者でおられる教皇フランシスコは、本名を「ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ」と言いまして、聖人となられたヨハネ・パウロ二世教皇から枢機卿に親任されました。そのため、ヨハネ・パウロ二世教皇がお亡くなりになった時からコンクラーベに出席しています。厳格な選挙の末、その時はベネディクト十六世が選出されましたが、次点だったのがベルゴリオ枢機卿でした。

●ベネディクト十六世が引退して、再度コンクラーベが実施されます。もちろん非公開の選挙ですが、人間が選挙するわけですから、何かの思惑があって「あの人を推したい」ということは当然あるわけです。ヨーロッパからずっと教皇様が選ばれてきたことを考えると、ヨーロッパの枢機卿

を担ぎ上げた枢機卿達も当然いました。

●しかし神は不思議な計らいで、アルゼンチン出身の枢機卿を新しい教皇として与えてくださったのです。ベルゴリオ枢機卿は、司祭の時も補佐司教の時も、さらに大司教、枢機卿になっても、貧しい人の友、虐げられている人々に寄り添う牧者でした。

●ベルゴリオ枢機卿がアルゼンチンの首都大司教であったとき、経済は破綻し、政治は腐敗し、貧しい人々に寄り添ってくれる人は誰もいなかったのです。人々が豊かさへと向かっていく中で、彼だけは「貧しさ」「貧しい人々」へと向かっていったのでした。誰も見捨てたりはしない。その信念が、今のフランシスコ教皇を動かしています。回勅を初めとする文書、弱い立場の人を奮い立たせる行動と、今までのあまり取り上げられなかった部分に光が当てられました。

●もはや、後戻りはありません。「ともに歩む人」特に「イエスが目を注いでいる人とともに歩む人」でなければ、神の良き道具とはなり得ないのです。私はどれだけ、「ともに歩む人」を意識してきたのでしょうか。「ともに歩む人」である教皇フランシスコ、ペトロ中村大倫明司教をお支えする決意をどれくらい持っているのでしょうか。司祭・修道者・信徒、皆が問われていると思います。

(赦しの秘跡についての導入をする)

「イエスとともに歩む」とともに歩む人④

マタイ 25・31-46

すべての民族を裁く

イエスとともに生涯を歩んだ人の報い。

【第四回】

生涯をイエスとともに歩んだ人の報いは計り知れない

・（前回の続き）大人の教会は他の教会ともともに歩む

●前回の話を少し補わせてください。平戸地区は頼もしい地区長神父様をいただいています。私の一学年先輩の山村地区長神父様です。顧問会で教区本部に出かけられた際、詳細な報告を司祭会議でしていただきます。

●最近教区本部の要請で「紙に起こしたものは配らずに報告してください」となったので、口頭での報告ですが、それ以前はとても分かりやすい報告書を提出していただきました。

●地区の要望にもていねいに耳を傾けてくださるし、それを確実に教区本部に届けてくれます。地区内での要請は、たまに教区本部にとっては頭の痛い内容もありますが、それも臆せず山村地区長神父様は届けてくださるので本当に頼もしいです。だからあんなに恰幅が良いのかなと思いました。

●また、地区長神父様の立場になると、地区の神父様から

の細かな問い合わせにも応えなければなりません。例えば、教区本部から公式ミサの取り扱いについて、平戸地区にも関係する新しい通達が出ていないか、地区の神父様方はいつも気にしています。

●中田神父もそうなのですが、「何か新しい通達は出ていませんか。通達が出る予定はありますか。いつ頃になりますか」とせっついてくる神父様もきっと一人や二人ではないと思うのです。「イエスとともに歩む人」ということで話をしておりますが、地区長神父様こそ、地区の神父様とともに歩む大変な仕事をこなしておられるので「イエスとともに歩む人」です。

●新型コロナウイルスまん延の中、新しい形で「ともに歩む人」となってくださった方々もいます。その一人は、東京大司教の菊池 功大司教です。新型コロナウイルスがまん延して東京教区はいち早く公式のミサが中止になりました。

●しかしこの状況を菊池大司教は指をくわえて眺めてはいませんでした。すぐに行動を起こしたのです。「行動」というのは、日曜日の礼拝に代わる動画を撮影して、YouTubeで配信する取り組みです。

●「YouTubeって何？」という人もここにはおられるでしょう。子供や孫の世代に聞けばわかりやすく説明してくれると思います。まあ簡単に言えば、録画番組をインターネットで観ることのできるサービスです。

●皆さんのお家にも、テレビ番組を録画するレコーダーがあるでしょう。録画したものは、いつでも観たいときに観

ることができますね。東京の菊池大司教は、日曜日の務めを果たせない教区民のために、少しでも役に立つものを録画して、いつでも観ることができるように準備してくれた、ということです。

●もちろん長崎大司教区も、後になって取り組みを始めました。例によって私は、教区本部がなかなかミサの動画を準備してくれないので、まだしないのか、いつするのか、東京や大阪はミサに与れない人のために YouTube を活用しているのに、長崎はどうして見倣わないのかとせつついたわけです。現在は、内容面でいろいろ不備がありますが、浦上教会での司教様のミサが YouTube で視聴できるようになってきました。

●こうした取り組みの先頭に立って下さった菊池大司教様は、「週間大司教」という専用のチャンネルを開いて、毎週教区民のため霊的な糧を用意してくださっています。長崎も大司教様が代わりましたから、「週間中村大司教」みたいなチャンネルを開設してくれたらいいですね。その時はぜひチャンネル登録してください。

●ここからは宣伝ですが、中田神父もミサの中止期間に YouTube でミサの様子を視聴できるように準備しました。割と早くから取り組んでいます。長崎大司教区にまだ取りかからないのかとせつつくくらいですから、早くから始めています。こちらはついでで結構です。YouTube を観ることのできる方は、カタカナで「ナカダコウジ」と入力して検索してください。気に入ったら、チャンネル登録ね。

●こうして、ミサ中止期間に、どうすればともに歩いてい

けるか、イエスのようにともに歩む人になれるか、その人なりの取り組みをしてきました。さらに踏み込んで、教会としてほかの教会とともに歩むことも、必要なことです。

●教会としてほかの教会とともに歩むことを考えてみましょう。平戸地区で「紐差教会」と言えば、いちばん信徒数の多い教会です。田平教会も、平戸ザビエル教会も大きな教会ですが、実質的には紐差教会がいちばん大きいと思います。規模の大きな教会は、自分たちの教会家族の中で、ともに歩む取り組みを考えると同時に、ほかの教会とともに歩むことも考える使命がある教会だと思います。

●田平教会では年間行事を計画するときに、私は頻繁に「田平教会家族のための活動だけでなく、田平教会からほかの教会にも働きかけ、歩みをとにもするような教会に育っていきましょう」と呼びかけています。信徒総会の折とか、予算決算作成の折とかです。

●自分の教会のお世話で手一杯だと考える教会は、例えば社会の中で「地区の行事」に協力しない家庭のようなものです。家庭は円満でも、地域との協力・連帯まで手が回らないのでは、本当の意味で成長した家庭とは言えないと思うのです。規模が大きい教会であれば、一度は考えてみる必要があると思います。

・イエスと生涯歩みをとにもした人の報いは大きい。

●3月17日は「長崎の信徒発見の記念日」で、中田神父の叙階記念日です。当時、「信徒発見の日を叙階式の日

決めましょう」と聞かされていましたが、今ではそれも遠い過去の話ですね。1992年の叙階式には私を含め三人が島本要大司教様によって司祭に叙階されました。今は2022年ですから、あれから30年になるんですね。

●前日の3月16日に任地の辞令を受けたのですが、「浦上教会・三浦町教会・福江教会」この三つの教会のうちどこかの助任になる。それは三人とも分かっていた。あとはどの教会か？ということで、三人が三人とも「浦上教会は川添神父様が主任だから、遠慮したいなあ」と思ってその瞬間を迎えました。あくまで噂ですが、「川添神父様は指導が厳しいらしい」という声が聞こえていたからです。

●島本大司教様に応接間に呼ばれ、それぞれに辞令が手渡されました。「はい。あなたは福江教会の助任です。」「はい。あなたは三浦町教会の助任です。」「中田助祭さん。あなたは浦上教会の助任です。」今でも忘れませんが、三人で顔を見合わせたとき、私の困ったような顔を、残る二人がニヤツとして「頑張れよ・・・」という目で眺めていたのを覚えています。

●しかし結果的には、私は川添神父様のもとで浦上教会の助任を5年間務めさせてもらい、感謝しております。あの5年間の貯金で、30年間務めることができたのだと思っています。確かに厳しく指導していただきましたが、深い愛の表れだったと思っています。

●これはついでの話ですが、叙階式の後信徒会館で祝賀会を開いてもらいました。先輩代表のお祝いの言葉は入口勝神父様でした。「驕り高ぶってはいかんよ。司祭はいつ

までも4歳。そのつもりで励みなさい」というありがたいお言葉でした。

●そして、参列者全員の前で、島本大司教様が三人の任地をリップサービスで発表してくださったのですが、これがまた忘れられないものとなりました。たまたま、私の親戚がビデオカメラを回してしまして、そこから音声を抜き出したのですが、皆さん聞きたいですか？これだけ言ったら聞きたいですよ。

「未だ叶えられていない辞令 19920317. wav」

●なかなか面白いでしょ？私はこの島本大司教様の任命はついに叶わずじまいだと思っていますが、世の中に絶対はないので、温めておきたいと思っています。特に音声の中で「嘘でしょ？」という声と「あれは間違い」という声については、誰が言ったかだいたい分かっていますので、もしその日が来たら謝ってもらおうと思っています。

●さて四回目の話は葬儀にまつわる話です。すべての人が、いつかは通らなければならない道です。そしてカトリック信者の場合、おそらく所属の教会の司祭が、葬儀ミサの説教をすることになります。私はこの点についても、浦上教会の5年間でたくさんの経験を積みました。

●浦上教会は年間にすると七十人から八十人くらいの方がお亡くなりになります。私がいた当時川添主任神父様と助任司祭が三人いて合計四人で割り振っていました。たいていの場合、地区集会に出ている地区の人が亡くなるとそ

の地区集会担当の司祭が葬儀を引き受けていました。そうするとだいたい顔と名前が一致するからです。

●しばらくして私にも葬儀のミサ司式が回ってきました。私は基本的に説教は原稿を用意して臨みます。結婚式も葬式もそうでした。しかしよく考えると、結婚式も葬式も、その人の人生を左右する可能性があります。原稿を読む説教では、結婚式葬式に限っては思いが伝わらないのではないか。そう考えるようになったのです。

●そこで、結婚式と葬式に限って、私は紙に書かずに説教することに決めました。場当たりの説教をしているのではなく、その人がどのようにイエスと結ばれていたか、そのことが伝わるように工夫して話すよう心がけました。

●特に葬儀ミサの説教は、故人の人生全体に関わる説教です。亡くなった方の何を知っているのかと問い詰められたらひとたまりもありませんが、少なくとも病人訪問をしたり、地区集会でお会いしていれば集会の中で人柄に触れたりします。そうしたことが、イエスの生涯のうちのどこかに当てはまらないか、考えるのです。

●イエスの生涯のうちのどこかに当てはまるならば、その人はイエスと同じ生き方を歩いた人、もっと言うとイエスとともに歩んだ人だと思うのです。イエスとともに歩んだ人ですと私が葬儀の中で説教することは、きっと天国の教会（煉獄の教会かも知れませんが）において同じく取り上げてもらえると信じています。

●たとえば、マタイの25章に「すべての民族を裁く」という話があります。「お前たちは、わたしが飢えていたと

きに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。」

●そしてこの話の結論は、「はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」というものです。ここで朗読し、味わってみましょう。

◆すべての民族を裁く（マタイ 25・31-46）

25:31 「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。

25:32 そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、

25:33 羊を右に、山羊を左に置く。

25:34 そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。

25:35 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、

25:36 裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

25:37 すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物を差し上げ、のどが渴いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。

25:38 いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたのでしょうか。

25:39 いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』

25:40 そこで、王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』

25:41 それから、王は左側にいる人たちにも言う。『呪われた者ども、わたしから離れ去り、悪魔とその手下のために用意してある永遠の火に入れ。

25:42 お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせず、のどが渴いたときに飲ませず、

25:43 旅をしていたときに宿を貸さず、裸のときに着せず、病気のとき、牢にいたときに、訪ねてくれなかったからだ。』

25:44 すると、彼らも答える。『主よ、いつわたしたちは、あなたが飢えたり、渴いたり、旅をしたり、裸であったり、病気であったり、牢におられたりするのを見て、お世話をしなかったでしょうか。』

25:45 そこで、王は答える。『はっきり言うておく。この最も小さい者の一人にしなかったのは、わたしにしてくれなかったことなのである。』

25:46 こうして、この者どもは永遠の罰を受け、正しい人たちは永遠の命にあずかるのである。』

●司祭は病人訪問をします。ときどき、ちり紙に千円札を包んで「車代にしてください」といただくことがあります。仮にこの方が亡くなったとき、私はこの方の思い出として、「〇〇さんは自分の家の近くに車を置く場所もないので、神父さんはどこかの駐車場に毎回車を停めているに違い

ない。そう考えたのでしょう。ちり紙に包んだお礼をくださいました」と思い出を添えることにしています。

●いちおう、葬儀の儀式書には「司祭は朗読された聖書のテーマに基づいて短い説教をする」と書かれてあります。朗読された聖書に基づいてですから、マタイ 25 章の「すべての民族を裁く」をちゃんと読んで、この方の生き方は、イエスが話された「右側にいる人たち」の生き方を全うしました。だから必ず報いを受けますと話しています。

●他にも、主任司祭になって生まれて初めて大きなお金が必要な事業「司祭館建設」に取り組みなければならなくなったとき、あるおばあさんが話を聞きつけて真っ先に寄付をしに来てくださいました。資金調達の苦労など、司祭になって背負うとは思いませんでしたし、神学校でも教えてくれませんでした。

●しかし、そのおばあさんは主任司祭が担う重荷を、真っ先に担いに来てくださったのです。イエスが十字架の重荷で倒れたとき、キレネ人のシモンが十字架を担いだ話があります（マタイ 27 章、マルコ 15 章、ルカ 23 章）。「キレネ人のシモン」は、イエスの最期の道のりをともに歩いた数少ない人でした。このおばあさんも、中田神父が背負うはずの重荷を代わって背負ってくださったのです。

●キリスト者の生き方は、必ずどこかでイエスの生涯の一部に繋がると信じています。洗礼を受け、堅信を受け、さらにその上にいくつかの秘跡のお世話になって教会と繋がっているのですから、イエスが示された生き方のどこかを、必ず切り取って倣うことができる。それだけの恵み

を十分に受けています。

●私がボートの免許を取ったとき、免許のことを日曜日のミサで話したらとても喜んでくれたお父さんがいました。この方は自分のボートを使いなさいと言って何回か練習に連れて行ってもらい、お世話になりました。このお父さん、定年で仕事を上がると郷里の出津に戻って定年後を暮らしていたのですが、なんと戻ってから二年も経たないうちにボートから海に落ちて、亡くなってしまいました。

●とても良くしてくれた方だったので私もガッカリしました。喪主になる奥さんが、私に葬儀ミサをして欲しいと依頼してきました。私は出津の神父様に了解を得て葬儀ミサをしました。その時こんな説教をしたのです。「お父さんは寛大な方でした。イエスのことわざを実行していた人生でした。」

●「『与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる。あなたがたは自分の量る秤で量り返されるからである。』（ルカ6・38) お父さんはいつもあふれるほどに量りをよくして、私に親切にしてくれたのです。」

●「そして、『だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。』（マタイ6・24) このイエスの教訓をよく理解していて、海に落ちていよいよ助からないと感じたとき、永遠の生命の主人である神に仕えることを選んで、命の与え主を愛してこの世の命を軽んじたの

だと思えます。」

●本当は、信じられなくて、辛い別れだったのですが、このお父さんはイエスの戒めを、喜んで受け入れて生きた人だから、イエスと歩みをもにした人です。だから、報いを決して失うことはありませんと、伝えたかったのです。

●ちょっとひとやすみしましょう。私の「こんなことにも付き合ったことがある」という体験です。滑石教会の時です。司祭館に、強面の男性が来ました。この人は近くのスナックで、滑石教会の人と飲んだことがあるようです。突然「おい、俺の行きつけのスナックに、飲みに来い。話の続きはその時にしよう。」そう言ってスナックの名刺を渡し、何日の夜何時に来いと伝えて去って行きました。

●行ったら行ったで絡まれないか。行かなかったら行かなかったでずっと司祭館に押しかけないか。考えた末に、顔を出すことにしました。念のため、危なくなったら役員を呼ぶつもりで行きました。

●すると、店は貸し切りになっていて、その強面の男性が一人カウンターにいました。「おう。来たか。」水割りかな、何杯か飲めと言われて飲みまして、歌を歌えと命じられました。これも何曲か歌ったら、「おれは教会に一度入ってみたかったのさ。お前、気に入ったぞ。教会で頑張れ。」そう言われて帰してもらいました。ちょっと怖かったのですが、徴税人の仲間と食事をしたイエスを思い出しました。

●こんなこともありました。葬儀が入って、通夜と告別式の日程が決まりました。通夜を控えた日の午後、喪主の息子さんから電話がありました。「トメ」さんという99歳の

おばあさんの息子が喪主でした。地域では「お」を付けて、「おトメさん」と呼ばれていました。喪主の人は公務員で、実は私も面識がない人でした。

●この息子さんが電話の向こうでこう言っているのです。「スタンドの花を二つ飾って欲しい。できますか?」「まあ、それは頼めばできますよ。」「スタンドの花は値段いくらぐらいなのか教えて欲しい。」「それはまあ、予算に合わせてできるでしょうね。」

●「あんた親切じゃないね。こっちはいろいろ知りたくて聞いているのに、のらりくらり返事をして。」「この電話は教会ですから。詳しいことは花屋さんに相談してくださいよ。」「え! どうもすみませんでした。」何ともばつの悪い葬儀になりました。

●さて、すべての話のまとめをしましょう。何よりもまず、イエスは私たちとともに歩んでくださる方です。はっきり自覚してイエスとともに歩く人(たとえばそれは司祭・修道者・熱意を持った信徒など)。ともに歩いているのだけれども、気がつかないままの人(それほど熱くない信徒、または遠ざかっている信徒)。囲いの外にいて、イエスを知ったならばともに歩いてくれる人。こうした人たちとともに歩んでくださる方です。

●どんなに遠い道のりでも、イエスは辛抱強くともに歩いてくださいます。私たちはその姿を学んだのですから、ぜひ誰かにとっての「ともに歩いてくれる人」になってください。時に数年単位で、時に人生を賭けて、その人とともに歩いてくれる人になってください。

●そして、「イエスとともに歩む人」は、決して報いを失いません。イエスの生き方のどこか一つでも切り取って、生涯その生き方を続けるなら、あなたはイエスとともに歩む人であり、必ずその報いを受けるのです。

●イエスとともに歩む場所は、時に個人と個人の間、時に社会の中で、時に政治の場面でも起こり得ます。人間活動のすべての場面で、私たちはイエスと一緒に歩くことが可能なのです。新しく一歩を踏み出しましょう。ありがとうございました。